

# ハイマート 「故郷」の射程

—— ドイツにおけるディスクールを通じて ——

宇和川 耕 一

## ハイマート 〈故郷〉の復権?

エドガー・ライツの映画『故郷 ドイツ年代記』は、1984年にまずミュンヘン映画祭で初演され、後にテレビ放映された15時間31分20秒に及ぶ長大な作品である。中部ラインのフンスリュックの小村シャバハを舞台に、第一次大戦後の1919年から映画製作の同時代1982年までの出来事が淡々と描かれる。主要な登場人物の一人パウルはラジオの制作に熱中し、結婚して二児をもうけながら突然行方不明になり、結局アメリカで成功して戦後帰ってくる。小さな舞台ではあるが、ラジオという新しいメディアは、村と外部との開かれた回路を象徴しているし、登場人物を介してのベルリンとのつながり、捕虜や進駐軍などを介しての世界との接点が随所に見られる。

映画監督としてそれまでは不遇で、『ウルムの仕立屋』で大損したライツは、フンスリュックの農民の孫で手工業者の息子である自分の来歴を見つめ直す意味でシナリオを書いていったという。とはいえ、自伝的なものを超えて「根源的なものを扱っている。ある歴史が一種の活気を、一種の真実を秘めているかどうか」が問題だ、と述べている<sup>1)</sup>。

ヴェネチア映画祭国際映画批評家賞ほか数々の賞を獲得したこの作品は、「第二次大戦後ドイツで生まれた最も重要な映画」(The Economist)『「故郷」はドイツの大いなる歴史を、その偉大さの衣を剥奪する次元に、つまり大きさをもたずとも尊厳をもって生きる小さな人々の次元に置き換えている。ライツは彼

の映画を歴史の熱流を通して導いている。」(DIE ZEIT)「『故郷』はく新ドイツ映画)にとって、『プリキの太鼓』が戦後ドイツ文学においてなしたものになろう。」(南ドイツ新聞)などの最大限の賛辞に値する、長大でありながら極めて濃密な「16時間の一分たりとも無駄なものはない！」(Volker Schöndorff)作品であることは間違いない<sup>2)</sup>

〈故郷〉はいま、ありとあらゆる場所にあふれている。一方では「新たな故郷志向」が言われ、例えばコンスタンツ大学の社会学者ヨスト・バオホによれば、「故郷的なものがまた注目されてきている」という。「地方の料理、郊外でのサイクリングやハイキング、地方史への関心、市民大学の方言講座、地元でのヴァカンス、そしてもちろん地元のクリスマス市場。[...]故郷がまた人気を呼び、すぐそばの生活空間が再び興味の中心に出てきている。」<sup>3)</sup>このいわば「故郷の消費財化」は、最近日本でも見られる現象であろう。他方、「故郷はいらない」として「〈故郷の日〉反対デモ」を呼びかける運動がある<sup>4)</sup>ここで言われる〈故郷〉とは、言うまでもなく第二次世界大戦中及び戦後、旧東プロイセンなどを追われた〈故郷難民 Heimat-Vetriebene〉の故郷のことである。

「〈Heimat〉という言葉はドイツ特有の言葉で、くよその言葉には恐らく訳せまい<sup>5)</sup>という。エドガー・ライツは、〈故郷〉の含意について、思い出や憧れ、喪失感、遠望感などドイツ・ロマン派特有のものを挙げたあと、次のように言っている。「〈故郷〉は次第に近づいて行って、そこに辿り着いた瞬間に跡形もなく消えてしまうようなものです。故郷はそこから離れるほどはっきり分かってくるようなもののように思えます。」<sup>6)</sup>他のところでライツは「故郷は思い出として、憧れとしてしか存在できない」<sup>7)</sup>とも言っている。ロマン主義における〈故郷〉、つまりは近代的な意味での〈故郷〉の概念は最初から、すでに失われた場として発見されたと言っていい。産業革命と資本主義の陰の部分で、都市的なものと農村的なものとはざまで産み落とされ、ロマン主義と共通の出自を持ち、共通の培養基の中で育っていった〈故郷〉が、ヨーロッパにおいて遅くまで地方性と前近代性を残しロマン主義が独特の展開を遂げてきたドイツで、特有の含意を帯びていったことは、不思議なことではない。

## 「故郷」の射程

この言葉ないし概念が現在もなお帯びている重層的な感情と共通するものは、日本語の「ふるさと」にもある程度感じられる。明治以降の日本の〈近代化〉の遅い開始と急速な発展が、ヨーロッパにおけるドイツと似通った展開をとったことに、その理由があるのかもしれない。が、ナチスの農民・農村政策〈血と土〉のイデオロギーがもたらした〈Heimat〉概念の汚染と、戦後におけるタブー化の結果および継続として、〈故郷〉が現代ドイツにおいて引き起こす上述のようなアンビバレンツ、拒否の対象としての〈故郷〉は、日本語の〈故郷〉をもってしては容易に理解しがたいだろう。まずは、そのタブーの来歴を振り返ってみたい。

### 〈故郷〉の誕生

18世紀末あたりまでの主要な辞書では、〈Heimat〉はあまり言及されず定義も曖昧だが、おおまかには〈生国・祖国 Vaterland〉と同義的に用いられたようだ。中性名詞として生家・生地としても使われ、これは現在も一部の地域に残っている。もともとは従ってむしろ事実的概念で、例えば〈故郷権 Heimat-Recht〉はもともとは出生地で生きるための基本権のようなものを指していたようである。

生国・祖国としての意味合いは、現在でもそうであるように、帰属意識をもつ共同体（パトリ）の規模に応じて変化するが、さしあたっては、18世紀から19世紀にかけて、フランス革命とナポレオン侵攻の影響を受けた時期、愛国的な調子を帯びる。例えば、グリム兄弟は民話を収集し、改作し、創作した『子どもと家庭のためのメルヒェン』において、（現実にはもはやすでにない）ドイツの森を、分断された祖国を表象するいわば共通の故郷として提示しようとした。ここから後の民俗学、〈故郷保護運動〉、あるいは〈故郷芸術運動〉への道はさほどの紆余も曲折もない。この〈祖国〉との語義的な関連が、その後現在に至っても、時々の政治状況に応じて二つの概念の距離を伸縮させているといえる。

しかし、他方、ほとんど同時期から、〈故郷〉が他の様々な含意を獲得して

いく背景と過程が、その後の〈故郷〉を考えるうえではより重要である。〈故郷〉は近代産業社会の成立と発展の、端的に言えば進歩とその裏面を抱え込むことで、豊穡化し複雑化し、問題化してもいくからである。

〈故郷〉はそこからの離別を契機にして立ち現れ、遠ざかるにつれて鮮明化してくる。長い中世のよどみのあと、そのような離別を促し、〈遠く Ferne〉を志向する大きな時代の流れが、まずは背景としてあり、香辛料を求めて東方へと向かう、いわば元祖グローバリゼーションには、望遠鏡 Fernrohr の彼方へと誘う憧れ (Fernweh=遠望)<sup>9)</sup>が潜んでいただろう。そのような前向き、自由を求めての旅立ちであっても、遠く離れるにつれ、時がたつにつれ、望郷の念は湧いてくる。アイヒェンドルフの『のらくら者』の主人公は、「毎日が日曜日」というこよなく脳天気な旅立ちと遍歴のあと、やがては多少ともドイツへの想いにかられる。ましてやそれが、労働力としての半ば止むにやまれぬ離郷であれば、その〈望郷 Heimweh〉は〈故郷〉(Heim) への強い痛み (Weh) を伴うことになる。

ホームシックネス  
 〈郷愁 Heimweh〉の語は、すでに1569年に「ズネンベルク heimwe で死す」と文献に見られるという。1688年にスイスの医師ヨハネス・ホーファーが『ノスタルギアあるいは郷愁病論』を著し、病としてのノスタルギア  
 〈郷愁 Heimweh〉という概念を立てた。ギリシア語の nostos (帰郷 Heimkehr) と algos (痛み Weh /Schmerz) からの造語である<sup>10)</sup>すでに日本語化しているノスタルジーという言葉も、郷愁という訳語も、すでに過去への哀愁という情緒的意味を帯びているが、そもそも原語の nostalgia/Nostalgie にその意味は薄い。しかも、そのような意味で用いられるようになったのはむしろごく最近のことであるらしい。ともあれ、ホーファーの造語は純然たる医学用語として用いられ、彼の医学論文からスコットランドの医師が〈home sickness〉の述語として導入して英語に取り込まれ、第一次大戦後〈過去への憧れ〉として一般化したものが、ドイツ語にいわば逆輸入されたのである<sup>11)</sup> 〈郷愁=ノスタルジー〉の原因をホーファーは、どちらかといえば心理的な面に関連づけつつ人的・自然的環境の変化に求めたが、18世紀の啓蒙期には空気圧の変化など物理・生理的な原因説が主

流であった。いずれにせよ、〈郷愁〉が病気として扱われたところに、〈故郷〉の陰に潜む近代化＝都市文明の仮借ない現実を見て取ることはできる。

〈郷愁<sup>ノスタルギー</sup>〉は19世紀に入ってからは、むしろ心理面に原因を求められるようになる。ロマン派によって〈郷愁<sup>ハイムヴェー</sup>〉は幼児体験の影響を受けた情緒として価値づけられる。やがて、内面や無意識の概念がフロイトによって提起されることになるが、逆にいえば、フロイトを初期ロマン派が先取りしたように、内面の問題としての〈故郷〉や〈郷愁〉も彼らによって先取りされていたのである。それまでは〈Fernweh〉はもちろんのこと、〈Heimweh〉すらもともと内面の問題ではなかった。つまり、〈故郷〉はまずは内面の問題ではなかった。

〈彼方〉への意識は一方で具体的・地理的な様々なレベルの境界の外と関わりながら、他方では同時に、思念の本質として現実を超えた時空間へと向かわざるを得ない。都市化によるものであれ、<sup>22</sup>政治的理由によるものであれ、失われた過去にあった、あるいはどこか遠い場所や未来の彼方にあるはずの楽園を希求する想いは、すでに古くから存在している。ヘシオドスの〈黄金時代〉は幸福に満ちた理想郷を過去に求めた点で、失われることを本質的に含む〈故郷〉の一面を端的に先取りしているし、ウェルギリウスの〈アルカディア〉も現実の地理的理想郷を速やかに離れて、詩人や芸術家の象徴的理想風景となった点で、19世紀における〈故郷〉のイメージと重なるだろう。さらにキリスト教由来の楽園イメージが混じり合ったかたちで、古来の理想郷イメージは18世紀の田園詩や絵画などに引き継がれていた。

〈故郷〉の概念はこれらの伝統を取り込みながら形成されていく。都市文明の腐敗、墮落への対抗概念という大まかな共通項のあることがそれを可能にしたといえるが、逆の言い方をすれば、楽園説話や田園詩の伝統は、産業革命以降の近代社会特有の諸問題のもたらすサンチマンからの癒しのイメージをもはや提供できない。だからこそ、それは〈故郷〉という概念に託され、田園詩の痕跡を留める〈田園<sup>ラント</sup>＝田舎

<sup>33</sup>とはいえ、19世紀前半、とりわけドイツにおいて、社会的現実から逃れて牧歌的田園や山岳僻地に、理想の小さな故郷の安らぎを求める傾向が強まっ

ていく。〈故郷〉が再び伝来の楽園表象へと退行し始めるのはなぜなのか。

Börnerによれば、「〈外的な〉地理的楽園に並んでにそれまでなかった新しいものが登場した。つまり、〈内的〉楽園、全く個人的な楽園の状態実現の主観的追求である。』<sup>14)</sup> 外の世界よりも内面世界に重きを置いたロマン主義——それ自体が啓蒙—産業革命への対抗的現象といえるが——は、そもそも理想の場所を内在化させる傾向を持つ。だからこそ、〈故郷〉は個人的に内面化された理想の場の新しい表象概念として、ロマン主義的な刻印を帯びている。一方で、大航海時代以来の異世界への発見と冒険の旅は、次第に純然たる商品と資本の運動と化していった。ヨーロッパ内部においても、瞬く間に大陸とブリティッシュ島を覆っていった鉄道網によって開花したツーリズムは、大衆化とともにキッチン商品となっていく。遠い海の彼方へ向けての旅も、ひたすら〈南島〉の楽園イメージをかきたてる。キャプテン・クックやトーマス・クック、あるいはタヒチを楽園とみなしたゴーギャンの、思いつきや行動がいかにか斬新で真摯であろうと、外の楽園追求が一部富裕層、資本家層からより広範な層の欲求に拡大すればするほど、結果としての地理的楽園がキッチン化していくことは避け難い。他方では、そこから取り残される層の楽園はいきおい身近な〈故郷〉、それもビーダーマイヤー的安逸の場所に投影されざるをえない。しかも、それとて背景に集積する甚大な社会・環境問題を甘美な無力感のオブラートに包むことができての話である。18世紀から大量に書かれる旅行記も、ロマン主義の内面への飛翔も、外と内の異空間イメージの消尽を伴う閉塞感の産物だった。

### 〈故郷〉から〈国家〉へ

ヴァルター・イェンスは、〈故郷〉は19世紀半ばまでは客観的な nüchtern 言葉で、哀しみや感傷的な輝きを帯びていなかったと言っているが、<sup>15)</sup> すでに見たように、また Lindemann の指摘するように、それは当たらない。<sup>16)</sup> 後期ロマン主義は、伝統的な楽園や牧歌の理念を〈故郷〉に織り交ぜることで、地理的な概念に近かった〈故郷〉にパトス醸成の場を提供したのである。Börner

はこう書いている—「19世紀はしかし歴史でないもの——神話、哲学、宗教、芸術など——と歴史を峻別した。そして歴史とは国家の歴史、国家がより多くの自由、繁栄、政治的権力、愛国的自尊心に向けて発展していく歴史であった。このような、国家が新たな神話となる〈純粹〉歴史意識の中では、人間の幸福への哲学的問いかけなどにはもはや居場所はなく、私的な、個人的なものの中へ追いやられてしまう。」<sup>17)</sup> このことが、国家形成に出遅れたドイツにとりわけあてはまることはいうまでもないだろう。だが、それゆえにこそ、個人的なものに追いやられた〈非歴史的なもの〉は、ドイツにおいて〈故郷〉のパトスを介して、集合表象としての〈故郷〉へ、つまり国家へと向かおうとするのである。

ビーダーマイヤーの小部屋における故郷情緒を出るものではなかった〈故郷〉だったが、19世紀後半、さらなる都市化、機械・技術文明の進展が状況を変える。工業化のために人口の膨れあがった大都市の労働環境、住環境、風景の悪化は言うまでもないとして、〈故郷〉の文脈で重要な変化は、河川の直線化、農業生産の効率化のための耕地整理、鉄道の普及などに伴う農村風景の急激な変化だろう。中でも鉄道の敷設は農村の風景を変え、また高速で走る車窓から見るという新体験によって風景の見え方を変えた。ドイツで鉄道が最初に敷設されたのは1835年である。機械文明を否も応もなく可視化するこの象徴について賛否両論があったであろうことは、想像に難くない。これを文明の進歩の象徴、新しい黄金時代の到来として手放しで賛美する声があがる一方、ヘンリク・シュテフェンスの次のような意見がある—「この点において、鉄道を益々導入していくことほど強制的な近代の危機はあるまい。」アイヒェンドルフは、「この蒸気車は、そもそも駅だけでできている世界を、たゆまず万華鏡のように乱雑に揺り動かす」と書き、車窓の風景の慌ただしさを嘆いている。<sup>18)</sup> 鉄道嫌いのラスキンの言うように、ここには近代の風景知覚そのものの変化が問われている—「できるだけ少ない変化で満足するのが、最も肝要なことだというのが、わたしの意見だ。[...] つまり旅は、速度と正確に比例してばかばかしいものとなる。」<sup>19)</sup> 鉄道を「人類に新しい転回をもたらす出来事」「世

界史の新時代」と呼び、「我々の時代はそこに居合わせたことを誇ってよい」と、むしろ肯定的な評価をしているハイネすら、次のような感想をもらしている——「ドイツは今時代の動きに引きずられていて、その考えは利己的でないとはいえやいえず、その抽象的な世界に生の事実がなだれ込んでいる。鉄道の蒸気車は我々に気持ちの震えを与えているが、そこから歌が芽生えてくることはなく、石炭の蒸気は歌鳥を追い払い、ガス灯の匂いは朧月夜を台無しにしている。」<sup>20)</sup>

この時期多数作られた鉄道詩も、進歩賛歌から機械文明によって失われる魂の哀歌まで、広いスペクトルにある。鉄道の知覚も鉄道からの知覚も——現在そうであるように——思いの外早くむしろ風景と風景知覚に組み入れられていったが、そもそもロマン主義的保守的認識が主流であったともいえない。むしろ、身分制度を現実に（ある程度）無化する鉄道の民主的性格が、大衆の支持を得ていたとも考えられる。一方、全体としての風景の変化についてはどうだろう。音楽家のエルンスト・ルードルフは1987年に〈故郷保全 Heimatschutz〉という概念を打ち立てた。彼もまた急激な工業化によって不可塑的に変わっていく風景を嘆き、ヘルダーのロマン主義的自然・文化観を受け継いで、文化とは自然と人間、土地と人々が歴史的な営為の中で作り上げてきたものであり、そのような文化の母胎としてのドイツの風土（故郷）の保全を訴える<sup>21)</sup>しかし、「彼ら〔保守的批判者たち〕は、近づいてくる大衆文化、都市化、文化的均質化、平等化が美の喪失に、世界の醜悪化につながらざるをえないことを、驚きの日で眺めた。」例えば、観光による自然美の破壊をルードルフは危惧するが、その背景には大衆の貧困化を伴う工業化・都市化がそのような自然美を求めさせ、観光が大衆化するということがある。「全ての社会層の多数は月並みだし、これからもそうだ」とルードルフも言わざるをえない<sup>22)</sup>ヘルダー自身が美的価値基準としては封建制の支持者であったように、これはむしろ身分制的な保守的価値観にもとづく運動であって、すんなりと多数の支持を得られたわけではない。が、どの社会層にもそれなりに受け入れられる〈故郷〉という言葉が、教養市民層を含めた社会全体で護るべき美的価値として、人口に膾炙



していったことの意味は大きいだろう。

かつて遍歴職人はネットワークを通じての文化形成を担う役割を負っていた。彼らの旅は名誉に満ち、尊敬と親愛をもって受け入れの同業者たちに迎えられた。しかし、大規模な産業化は手工業を蹂躪し崩壊させ始める。テンニースが『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト Gemeinschaft und Gesellschaft』（1887）を著した時代、産業革命後の都市への農村人口の流入は、遍歴職人たちの生業のよすがであり、身を寄せる場でもあった情緒的近隣関係や親縁関係、伝統に基づく旧来の共同体の紐帯そのものを次第に引き裂いていく。そこでは〈故郷〉は空間的距離ゆえに鮮明化する喪失感であるよりも、あるいは同時に、その現実的足場そのものの喪失をも含意している。家郷は離れるがゆえにのみ失われるのではなく、実体として失われていくのである。都市は、もともと〈故郷権〉を持たない者にとっては、そもそも〈故郷喪失者〉としての困窮の中で生きる場でもあった。都市化はさらに、上の二重の意味での〈故郷喪失者〉を生み出していく。遍歴はアナクロニズムと化し、遍歴職人は遍歴貧民と化す。19世紀末には、怠け癖と遍歴欲は精神病だとの似非医学的言説すらなされる<sup>23)</sup> 1986年にベルリンで始まった〈ワンダーフォーゲル〉運動は、遍歴職人や遍歴学生の自由と〈郷愁〉を即席に追体験しようとする運動である。彼らは住み慣れた〈故郷〉を後にして自然の中に出ていくわけではない。むしろ彼らは住み心地を得られない都会から、未知の〈故郷〉への〈Fernweh〉に誘われるのである。「文明化した人間、知的遊牧民は再び [...] 狩人や羊飼いが感覚的にそうであったように、全く故郷を持たず、精神的に自由になる。」とシュペングラーは言う（„Der Untergang des Abendlandes“）。この「故郷をもたない（あるいは喪失する）」自由は彼にとっては西洋文明の没落の徴候とされるが<sup>24)</sup> 農民であれ、都市労働者であれ、グローバルな市民であれ、少なくとも近現代のすべての者が関わらざるをえない宿命だとは言えるだろう。であればこそ、〈故郷〉は広い支持を得るためのキーワードになったのではないか。

自然や風景を再評価する上述のワンダーフォーゲルをはじめとする〈青年運

動〉はむしろ関連する理念的なレベルの運動と言えるだろうが、同時期、農村の住民自体の激減を食い止めるための様々な試みがなされていた。民俗学者ヴァルヘルム・ハインリヒ・リールなどは家族年代記を書くことを勧め、具体的に農村住民のアイデンティティの再構築を図った。ルードルフの運動もこれらと連動するもので、1904年にドレスデンで設立されたルードルフらによる「故郷保護連盟 Bund Heimatschutz」は、活動分野として次のような項目を挙げている—文化財保護、伝統建築物保護、廃墟を含む風景像の保護、土地の動植物・地質学的特性の救済、無形の民俗文化、風習・慣行・祭り・衣装。

こういった一連の動きが、やがて来るナチズムの〈故郷〉イデオロギーの準備となった面もあるだろう。とはいえ、この活動は環境保護の観点から意味があるため、現在では多々言及されるが、〈故郷〉概念の広範な支持と政治化にさほど影響を与えたわけではない。それに与ったのはむしろ別の運動である。1890年以降の〈故郷芸術運動 Heimatkunstbewegung〉こそ、ナチスの〈血と土〉へつながる〈故郷〉の政治イデオロギー化の推進母体である。それは文化ベシムズム、大都市嫌悪、農村ロマン主義、生命主義、国家主義、反近代主義という19世紀反近代文明ルサンチマンの集大成の如き様相を呈している。「そのはっきりした意図は、文化全体を風景を条件とした血統的基盤の上に置くことだった。」その結果、「情緒と内面性が祖国の〈守り〉のために動員される。故郷は風景、民族性、過去と同義語になる。」<sup>25)</sup>すでに次第にキッチュ化する〈故郷文学〉の〈村物語〉において、「〈故郷〉と〈村〉の同一化が故郷イデオロギーの本質的な要素にな」っていた<sup>26)</sup>〈故郷〉はもはやビーダーマイヤー的キッチュ・イメージとしてではなく、さらには小説内の表象としてでもなく、具体的場の表象として生きられつつイデオロギー化されていく。しかも、それは地域を越えて国家にまで拡張される。Bastianによれば、森の文学、狩猟文学として人気を博したヘルマン・レーンズが、「〈故郷文学〉から〈血と土文学〉へのスムーズな移行の手本である」という。「〈故郷〉のイデオロギー化は、ワイマール共和国時代には戦前に比べて少し後退していたものの、地と土文学において最高潮に達する。故郷概念のイデオロギー化とは、ここでは、主観的、詩

的感情である〈故郷〉が、客観的な、一般的拘束力を持つ価値に高められることで、その一回性を奪われるということである。〈故郷〉は、支配的芸術教義に任ぜられた地と土神秘主義の中心綱領となるのだ。』<sup>27)</sup> いうまでもなく、これもまた〈故郷〉概念がもともと持っている側面の現れにほかならない。

### 〈血と土〉——ナチスにおける〈故郷〉

「第三帝国のもっとも評価された画家の一人」ヴェルナー・パイナーの『ドイツの大地』はナチス政権下の農民の意味づけを神話的・象徴的に表している。〈ドイツの大地〉とは「パイナーにとって、農



夫の汗のおかげで均等に耕された農地である。農夫の仕事は晴れやかな輝きの中に現れている [...]。農夫はしかし自分のためではなく、ドイツのために働いているのだ。彼の土地は〈ドイツの大地〉であり、それを耕すことが自らの義務の遂行なのである。』<sup>28)</sup> キッチュな駄作の多いナチス芸術にあっては「平均以上」の作という (Eschenburg) この〈血と土〉風景画は、白黒の馬や鉤十字を連想させる格子状の鋤によって、ナチスの神話的農業観を示している。馬による耕作は実際にナチスが考えていた非機械的農業をも連想させるが、極端な遠近法と直線的な構図はむしろ機械的能率主義の印象を与える。そして、そのこと自体がナチスの農業政策、農業観の矛盾する二面性を示しているとも言えるだろう。

1930年党の機関誌に発表された「ナチ党農業綱領」は、農民の価値を積極的に打ち出した。しかも、「民族の遺伝的健全性の主要な担い手、民族の若返りの泉、国防力の脊髄として」というのである。農民は人口政策上の最重要集団として持ち上げられる。ナチ党の食糧・農業大臣になる農本主義者リヒャルト・ヴァルター・ダレーの『血と土からの新貴族』(1930)では、古代ゲルマ

ンにおいてドイツ農民は「貴族」であったとされるが、これは単にドイツ社会の歴史における身分制の逆転を意味するにとどまらない。「稀少な純粋種の〔ウマの〕オスとメスを掛け合わせて由緒あるハノーバー種をつくりだすのと同様、最良のドイツ人の血から交配によって不純な要素を取り除き、再び北方人種の純粋種をつくり出すだろう」とダレーは述べたという。かくして、農民は人種の優越を保障する存在にすら持ち上げられる<sup>29)</sup>。工業化によって大都市に吸収される農民の流れはいつこうに止まらない。ナチスは、上述のように醸成されつつあった、近代文明批判、伝統的文化や自然の喪失への危機感を背景に、まずは農民たちの支持を得ようとする。

世襲農場制や農産物価格の固定によって血と土地の継続を保障することで、〈血と土〉の観念は具体化される。さらにはドイツ西部工業地帯への人口集中によって過疎化し荒廃する東部への植民政策がとられる。この「ロマンティックな植民熱」(Hans Raupach)は農民をはじめ関連する業者に職業を与えるだけでなく、永続的な新しい故郷を与える事業でもあった。だからこそ、入植者の選抜では血筋が重視されたという。こうして、世襲農場法と〈血と土〉イデオロギーと植民構想がひとつになる<sup>30)</sup>

これはしかしドイツ国内に留まらない。戦争に突入し、ワルシャワが陥落した後、ベルリン大学教授コンラート・マイヤー・ヘトリンクは1942年、第三次「ゲネラルプラン・オスト東部総合計画」を親衛隊長で「エス・エスドイツ民族性強化のための帝国委員会」委員長ハインリヒ・ヒムラーに提出する。既住民からの買いたたきや暴力的追放などによる「民族の耕地整理」によって、この東部占領地の「ゲルマン化」は行われた。ヒムラーは、「東方占領地域の景観形成」の「目標」をつぎのように述べる。

東方占領地域における景観は文化的に無能な他民族によって粗末に扱われ、荒廃させられ、掠奪農法によって不毛にさせられている。その景観は、大部分、現地の諸条件に反してステップ風の風土になってしまった。

しかし、ゲルマン・ドイツ人にとって自然とのつきあいとは、深遠なる生命の欲求なのである。その古き故郷と、民族の力によって移民し何世代

もの時が流れるなかで形成された領域においては、農場と菜園、植林地、耕地、景観の調和した像こそが、その民族の本質の徴しるしなのである。森、带状に伸びた森、生け垣、藪、木々によって囲われ境界が設定された耕地、水域と地形による自然なスクリーン、植林地の緑化は、ドイツの文化的景観のたしかな徴なのである。我が人種の農民は、土壌、植物世界、動物世界の自然的諸力を高揚させ、自然全体のバランスを保持することに尽力していたいまでもしている。農民にとって、神の御業に対する畏敬の念は、あらゆる文化の基準なのである。／それゆえ、もし、新しい諸生命空間レーベンスロイメが植民者たちにとって故郷となるためには十分に練られた計画と自然に寄り添った景観形成が決定的な前提である。それは、ドイツ民族性の強化のための基盤となるのだ。／つまり、我が民族を移民させ、他民族を排除するだけでは充分ではないのだ。むしろ、諸空間ロイメは、ゲルマン・ドイツ人が我が家のように安心して、そこで定住するようになり、その新しい故郷を愛し防衛する準備ができるように、我が人種の決定的な特色を保持しなければならない。そのような景観においてしか、慎ましやかで意味深い生命の諸力が生育し繁栄しないのである。<sup>31)</sup>

ナチスの台頭とともに、民族主義的妄想がありとあらゆるキッチュなユートピアを紡ぎ出していた。一連の開拓入植もその例にもれない。それらを分析した後、ヨースト・ヘルマンは次のように問いかける－「ナチ党の掲げたイデオロギーの最終目標とは、機械のない世界、文明なき世界を築きあげることだったのか？ 過酷なまでの農民生活を再び神話的な〈郷土 [故郷]〉の世界として創りあげることだったのか？」その答えは次のようなものである－「ナチ党は、1933年から1938年にかけて、統計によれば全男子労働人口の約四分の一が離農し、工業都市へと移った事実を黙認したのである。だが公式見解ではそういう話はないことにされた。この時期ナチ芸術やナチ・プロパガンダで前景化されたイメージとは、輝くような金髪の入植者夫婦が自分たちの産んだたくさん子どもたちに囲まれた姿である。一方で工場労働者は男女を問わず、ナ

チスの躍進を現実に支え、軍備拡張の原動力となったにもかかわらず、一般の目に触れることはほとんどまったくと言っていいほどなかったのである。』<sup>32)</sup> バイナーの絵の如く、結局ナチス農業は直線的・合理的道を歩むことになる。

すでに1933年、農業家マインベルクはつぎのように発言している。「われわれは農民パウエルン・ロマンティカー的ロマン主義者に抵抗する。彼らはわれわれを知らず、おそらく半年前あるいは一年前には農民のなかに馬鹿者や遅れた人間をみていたであろうが、いまや反対に転じ、彼らの間で『農民はモード』になった。われわれはこの流行に抵抗し、いまや各農民のなかに天使の姿をみるこれらのへぼ文士連に抵抗する。われわれには、他の諸身分と同じように欠点もある。われわれは賛美されるつもりはない。農民層がドイツ国家の生活に必要なことを認めていただきたい。その他の点では、われわれとまじめに知り合おうとする人々がわれわれとかかわり合ってくればいいのである」。ルードルフの運動やワンダーフォーゲルがそうであったように、〈故郷〉の愛好者はむしろ都市民・ナチスの蔑称する「アスファルト・インテリ」の中にいたのだ<sup>33)</sup>

〈血と土〉は〈故郷〉のプロパガンダであり、〈故郷〉移植のイデオロギーである。ナチスが進めた有機農業(パイオ・ダイナミック農業)にもそぐわない、木に竹を接ぐようなこの植民政策の成果は、当然の如く上がらなかった。〈血と土〉のイデオロギーは〈故郷〉を利用したが、この〈故郷〉はもはや保守的〈故郷〉の概念にすら大きく矛盾するものに他ならなかった。

## ライツ『故郷』の文脈

1960年代から70年代にかけて、〈故郷学〉が人気の専攻分野になるなどして、「ハイマート(故郷)の概念が生まれ変わった(1979, DER SPIEGEL)」と言われるようになったが、この再発見は知識層によるもので、多数の一般人にとって〈故郷〉というテーマが廃れていたわけではない。特に、20年代末から盛んに作られていた山岳映画などの流れを汲む、ドイツ特有のジャンルというべき〈故郷映画〉は、50年代の戦後復興期に人気を呼び、戦後最初のカラー映画『黒い森の乙女』は1,400万人が訪れたという。戦後の人心を癒す役

割を果たしたことで、まさに型にはまったキッチュの無害さから、ナチスの〈故郷〉と関連づけられることもなかった。〈故郷〉を破壊したのは、ナチスが批判した都市化、文明化、産業化による以上に、他でもない彼らの率いた戦争そのもの（しかもそれ自体機械化された近代戦争であるが）であった。その傷跡の大きさで見えなくなっていたとはいえ、19世紀から続いてきたもとの故郷喪失の現実が戦後なくなっていたわけではない。〈故郷映画〉はやがて、経済復興の中で都市を含めて平板化し無機化する風景に対して、次第に、それにふさわしく感傷的で型にはまった〈故郷〉像を提供することになる。

一方では、ローマ・クラブの報告が出され、都市における環境汚染や景観破壊、地方の自然基盤・生活基盤の疲弊はいよいよ抜き差しならなくなった。とはいえ、環境問題が議論の表に出てくると、あらゆる面でナチスの負の遺産が顔を覗かせる。なにしろ彼らは動物の生体解剖に反対して「動物保護法」を作り、「自然保護法」を作り、「野生生物の生息環境を守るために」低木の茂みや雑木林を保護する法律を作り、人工肥料の悪影響についての研究をし、有機農業を行ったのだ。リベラルや左派の側は——そのむしろコスモポリタンの〈故郷喪失〉性も手伝って——エコロジー関連の語彙を聞く度に「エコ・ファシズム」の響きに警戒しなければならず、結果として環境の問題への取り組みを失っていた。こうして、〈故郷〉が景観や社会環境を守るスローガンとして再登場することになる。何よりも、森好きのドイツ人が酸性雨などによる〈森の死〉にショックを受けたことが大きく、ドイツの森とともに故郷が再発見されたといわれる<sup>34)</sup>

ライツの『故郷』が登場するのは、このような脈絡の中である。しかしやはり、この映画の成功をナチスによって利用された〈故郷〉の復権といふか見方は当然ながら根強かった<sup>35)</sup>ライツ自身はそのような意図も、映画がそのような傾向を助長する可能性も否定して、<sup>36)</sup>次のように言っている。

「第二次世界大戦、30年代、戦後の時期——ナチスの時代だったこと、歴史的に何が起きたか、ということは当然知っています。そういうことが

どういうことを意味するかも考えます。例えばナチスの追隨者たち、小市民が責任を負うべき諸々のことに巻き込まれていったことの問題。しかし、そういう考えを映画にすることが問題なのではない、ということを学んだのです。』<sup>37)</sup>

彼の意図と方法は、歴史の意味を問うよりも細部を生き生きと描くことにあり、映画という表現手段がそれを可能にするということのようだ。「人生の秘密は、決定的な瞬間に真摯に人生に集中し、考えをいわば一人で走らせて、その痕跡をできるだけ正確にたどるなら、映画でのみ表現できるのだということです。」したがって、『ホロコースト』のような一般化された戦時の描き方は、彼にとって生命を感じさせないものでしかない。

「『ホロコースト』を見て] いつも腹が立ったのは、映像が間違っていることです。[...] 絵の一つも本当に合っていない、微笑みの一つも、言葉の一つも、話される文も、違うのに、本当にそうであったかのように見えてしまう。

それを分けることが出来るということ、心を動かすものを顔の表情から引きちぎってしまうことができる、というのにまた腹が立ちました。』<sup>38)</sup>

歴史の評価や安易な物語性に関しては禁欲的な距離を保ち、土地の言葉で話し生活のディテールを生きる人々を描くところに、ライツの意図と方法はあったのだろう。

旧東ドイツ出身の新進作家で、ライツの『故郷Ⅲ』の製作に加わったトーマス・ブルスイヒは、上述のような経緯をまとめながら『故郷』の意義について次のように書いている。

〈故郷〉はナチスに悪用されたために、長い間タブーだった。ナチスは偽りの感情を動員し故郷感情も利用したため、〈故郷〉は犯罪の要素となっ



## 「故郷」の射程

た。故郷を言う者は、アウシュヴィッツから何も学んでいない、と明に暗に言われてきた。[...] よりによって最も臆面もなく故郷という言葉を使う者が、ヨーロッパの戦後秩序を疑問視する懲りない連中であつたのは、ほとんど論理の必然である。そして、いわゆる〈故郷映画〉が保守ガリガリの理想郷を描いている（〈これ見よがしさ〉と現実から目を背けさせる点で故郷東ドイツ・プロパガンダに似ている）限り、〈故郷〉は永遠に過去の者たちの感傷的な言葉だった。〈故郷〉は新たに発明されないまでも、少なくとも埃を払われねばならなかったはずである。映画監督エドガー・ライツが11部からなる彼の映画を『故郷』と名づけた功績は、評価してもし過ぎることはない。ライツはこのすり切れた概念に、迷いなく、真摯に、限りない時間をかけてテーマに迫る映画をぶつけた。この映画は、故郷が——それを認めようと認めまいと——すぐれて生き生きした現象であることを明らかにした。[...] 故郷の概念は突如生氣を取り戻し、それまでになく信頼性のあるものとなり、極めて問題を孕んだ議論に適うものとなった。故郷は突然、同時に愛され呪われるものとなったのである。』<sup>39)</sup>

ライツの映画製作姿勢によるものであれ、作品の規模にもかかわらず（あるいはそれゆえに）、しかもドイツ国内を超えて、大ヒットするという事件性によるものであれ、「故郷」というタイトルすらが冒険であつた——少なくとも知的論争の領域では——状況下におけるこの作品の登場、その圧倒的な存在感によって、〈故郷〉がテーマとしてのタブー視から復権し、より広い論議の場に出たことは確かであろう。

## 〈故郷〉の射程

〈故郷〉はドイツにおいては〈血と土〉にまみれ、キツチュに墮した後も、失われてしまった、あるいは失われつつある、さらにはまた再び獲得されるべき自然や環境の表象として生きている。高速度で越境するカネとモノと情報のグローバル化の時代にあつても、多くの人間の生活の場としての〈地域〉の理

念として存在している。ありえない時空（ユートピア）であれ、そのような場所を約束する空手形であれ、内面の癒し・安らぎであれ、現実の世界が様々な離散や悲惨（<sup>エーレント</sup>Elend はかつて Heimat の対義語だった）や生きづらさの場である以上、娯楽と消費の対象としてのキッチュを超えて〈故郷〉は存在し続けるのであろう。

一見時代遅れで矮小過ぎるように思われる〈故郷〉の概念が（再び）意味を持つ大きな要因は、その含意の多様性と感情に訴えかける力が、捨て難くかつ他のもので代え難い点にある。が、まさにその理由によって、「故郷が陰謀、偏狭、陰険、不寛容、差別、隔離、追放と同義であるような、そういう経歴を持つ人」がいる<sup>40)</sup>以上、〈故郷〉が今、そしてこれから、国家と同一化され狂信的愛国心の鼓舞や領土の拡張や他民族の排除に利用されることと無縁である保障はない。愛国心や愛郷心などのアイデンティティそのものを一つの囚われと見る立場も、混成文化時代の寛容として必要であろう。だが、例えばボスニア戦争によってスイスに逃れ住んでいる若者たちにとって、〈故郷〉や愛国心は自然な感情と考える他はあるまい。差別され、排斥され、離散していく人々にとって、失われ、ゆえに取り戻されねばならないものを表すのも、やはり「故郷」という言葉なのである。

Peter Burke によれば、歴史的にみて個人は幾つかの集合的アイデンティティをもってきたが、〈文化的遅れ〉というケースがあり、テクノロジーの進歩にともなう速度に対し人間の対応は遅く、そこで〈心情〉の問題が関わってくる。すでに見てきたように、近代的な意味での〈故郷〉の誕生の契機はそこにあったし、グローバル化や（特にメディア）テクノロジーの変化の著しい現在もまたそのような時代であるとみることができるだろう。また、19世紀には国家の形成の速度に国民的アイデンティティの形成が追いつかなかつた、ヨーロッパ・アイデンティティ形成の問題が解決されないうちに、それが時代遅れになるような傾向が現在のグローバリゼーションである、という<sup>41)</sup>ナチスの台頭というヨーロッパにおけるドイツ特有の問題の遠因はここにもあるだろう。とすれば、グローバル化をめぐるアイデンティティやメンタリティの問題

は、あらためて〈故郷〉概念を要求するのではないか。そしてその意味では、ドイツにおいて連綿と続いてきた〈故郷〉のディスクールは何らかの有効な示唆を与えてくれるのではないか。Burke は、21 世紀のヴィジョンに「グローバル化、反グローバル化、混合」の三つの方向性があるという。〈故郷〉概念がこれらの方向性のなかで残っていくとすれば、それはどのような射程を持ちうるのか、最後に考察しておきたい。

まず、現在も大量に流通している商品としての〈故郷〉について。ここでは紋切り型の〈故郷〉イメージが再生産されつつ一定の〈故郷〉イメージをつくり続けている。この〈故郷〉模造品の出来の善し悪しは別としても、そこにある需要が何らかの欠乏感や〈癒し〉の希求を表しているとはいえる。まして、もう少し真摯な〈故郷〉志向は、やはり現代において失われたと多くの人々が感じているものが、楽園やユートピア幻想の後、〈故郷〉に託されているといえることができる。Beate Mitzscherlich は「故郷をつくっていく心理的必要性」を説いているが、それによれば、「故郷と結びついた感情や欲求」には三つあり、一つは〈sense of community〉（穏やかな社会的統合、社会的帰属感）、二つめは〈sense of control〉（環境を知り、影響しコントロールすること）、三つめは〈sense of coherence〉（個人を超える意味の連関、人間を（全）世界と結びつけるもの）である。これらは「当然のもので、心理的に納得のいく、必要なもの」である、という<sup>42)</sup>実際にこれらの欲求が個人的・社会的に充足されない、あるいは脅かされている——もちろん 19 世紀や 20 世紀初頭とは違った文脈においても——からこそ、いまなお〈故郷〉が求められているわけである。

住むための具体的で理想的な場所としての〈故郷〉は、すでに〈故郷保護運動〉などで唱えられていたものである。Piechocki が明らかにしているように、戦後、とくに 60 年代以降、〈故郷〉はエコロジー関連概念に置き換えられてきたといえる。〈故郷〉は〈エコシステム〉に、〈故郷保護〉は〈エコシステム保護〉に、という具合である<sup>43)</sup>

その背景には〈故郷〉のタブー化がもちろんあるが、他方、近代化のツケと

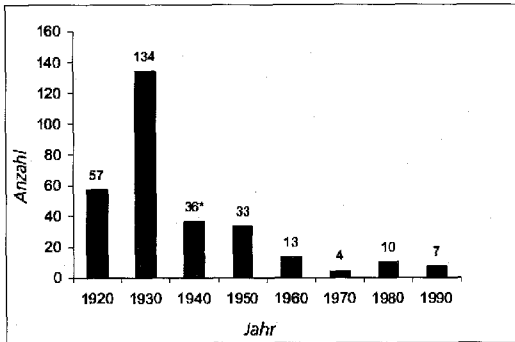


Abb. 1a:  
Verwendungshäufigkeit  
des „Heimat“-Begriffs  
in den Inhaltsverzeichnissen  
der Zeitschrift  
„Natur und Landschaft“  
(in 10-Jahresperioden im Zeitraum  
von 1920-2000)

図1 『自然と風景』誌目次における〈故郷〉概念の使用頻度 (1920~2000年) (Piechockiによる)

Tab. 1:  
Substitution  
der „Heimat“-Begriffe in  
den Inhaltsverzeichnissen  
der Zeitschrift „Natur und  
Landschaft“ durch  
„Ökologie“-Begriffe

dominierende Begriffe in „Natur und Landschaft“	
vor 1970	nach 1970
„Heimat“	„Ökosystem“
„Landschaftspflege“	„Ökosystemmanagement“
„Heimatschutz“	„Ökosystemschutz“
„heimatlich“	„ökologisch“
heimische Arten	„Biodiversität“

図2 『自然と風景』誌目次における〈エコロジー〉概念の使用頻度 (1920~2000年) (Piechockiによる)

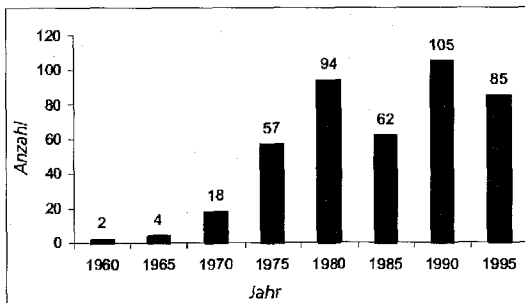


Abb. 1b:  
Verwendungshäufigkeit  
der „Ökologie“-Begriffe  
in den Inhaltsverzeichnissen  
der Zeitschrift  
„Natur und Landschaft“  
(in 5-Jahresperioden im Zeitraum  
von 1960-2000)

図3 『自然と風景』誌目次における〈故郷〉概念の〈エコロジー〉概念による置き換え (Piechockiによる)

しての環境問題が、世界的・一般的なものとして客観的・科学的対応を迫るものとなってきたということがある。〈故郷〉はそのための概念としては確かに具合が悪いだろう。が、逆にそのことによって捨象されていったのが、個人の経験や人間関係など科学的・数値的に計りがたい感情的な側面である。Schemelによれば、環境保護において「合理的な、知力にのみ訴えかける論拠が議論を支配している。感情は除外され、主観性のために素人的とされ、それどころか神経質とされる。専門用語における感情の否定は住民からは不誠実と感じられる。」このような理由から、「〈自然〉という言葉は、感覚的・感情的な連想によって、諸問題を連想させる〈環境〉という言葉より、かなり好ましい反響を引き起こすことがはっきりしている。」という。こうして、〈故郷〉はそれら全体を包含する概念として再浮上することとなる。「自然保護の専門家からこれまでほぼ避けられてきた〈故郷〉概念を専門語彙に取り入れようという試みも、この方向を指している [...]。というのは、ここでもまた、故郷概念に共振している多層的な感情の方が、合理的な見方に限った論拠よりも住民により理解され、〈受ける〉からである。」<sup>44)</sup>

だが、ある者にとって美しい〈故郷〉が、誰にとっても美しいわけではない。用心してかからねばならないのは、〈自分探し〉、アイデンティティや理想としてのパトリアの追求が、ナルシズムや排他性につながる危険と裏腹の関係にあるということである。集団アイデンティティ概念としての〈故郷〉が本質的にその罠に陥り易いことを我々はすでに見てきた。2005年ブルガリアのソフィアで、マケドニア、ルーマニア、ブルガリア、ドイツから11人の作家が参加して、出身、国家、祖国を議論した。ルーマニアの女性作家にとっては、〈故郷〉に独裁時代のイデオロギーの響きがいまなお耳に残る。逆に、社会主義国家の干渉から逃れた場所が〈故郷〉であった人もおり、だからこそ、「故郷と国家が同一視されるのはいやです」とブルガリアの詩人 Mirela Ivanova は言う。セルビア生まれで、現存のマケドニア最高の詩人とされる Bogomil Gjusel は、故郷に帰りたいという願いと、「セルビア版〈血と土イデオロギー〉」の戦争における〈故郷〉をめぐる大衆ヒステリーの記憶との板挟みになっている。<sup>45)</sup>

「故郷を創る」ということが、理想的な自由の場を作り上げることを超えて、安心／安全という名の固陋やアイデンティティという名の集団イデオロギーの磁場に容易く変わり得るということを、ヴィレム・フルッサーのブラジル経験は示している。ブラジルは最初誰の故郷でもなかったから、「移住者は不快な異人としてではなく、偏見なく故郷を持たない同じ運命の仲間として迎えられた」。そこで彼は「新しい、人間にふさわしい、偏見のない故郷の創設に熱中した。」やがてしかし「偏見が固まり始めた。つまり、新しい故郷の創設が成功しはじめた。」そして最終的に彼には「この故郷がどういうものかもはっきりした。偏狭さ、ファナティズム、愛国的偏見においてヨーロッパの故郷に引けを取らない、巨大な、進歩した装置である。」<sup>46)</sup> 反グローバリズムの地域アイデンティティは、このような自覚のもとに主張されねばならないだろう。〈伝統〉や〈アイデンティティ〉を受け渡し可能な実在的価値と見る姿勢は、回復不可能な慢性的喪失感をもたらすだけでなく、文化的ステレオタイプやレトロ・キッシュへの誘惑を通じて、人間と人間、人間と自然（環境）の関係の見直しと、生きる関係・場としてのその意味ある再構築を妨げるだろう。その際、フルッサーのいう、〈移民〉という存在の役割は重要な示唆であるように思われる。

「グローバル化した多様な関連を見ない故郷観はフィクションである。」と Regina Römhild は書いている。<sup>47)</sup> Burke のいう〈混合〉のシナリオ、「中心を犠牲にした両端の上昇、つまり国家を犠牲にしたグローバルなものと同ローカルなものの上昇、すなわち（国民-）国家の消滅」<sup>48)</sup> は、フランクフルトではすでに現実である。そこでは、「アンケートに答えた [移民の] 若者の 2 / 3 が自分をフランクフルト人と感じ、半分足らずが——部分的には同時に——両親の出身国とのつながりを感じているが、ドイツ人と感じているのは 1 / 5 にも満たない。」ベルリンでは、トルコ系の若者が独特のトルコ-ドイツ語「カナーク・シュプラーク Kanak Sprak」でラップを歌っている。「移民は文化的複数化を生む。というのは、ここで生じているのは、グローバル・ヴィレッジの統一文化ではないからだ。グローバルなものがローカルなものに出会うとき、文化

は更に差異化される。それらは絶えず新しい組み合わせで多様化していくのだ。<sup>49)</sup>このような文化のあり方、このような〈故郷〉には、違和感がつきまとうだろう。しかし、そこから多くの文化が創造されてきたこと、創造されていることは、歴史上および現在の厳然たる事実である。

〈故郷〉がそもそも、そこに生まれ、受け取るだけの場ではなく、作り上げていくべき場であるとするれば、それはいわゆる〈故郷〉のみならずどのような場所にも該当する。1995年に「カナーク・シュブラーク」を出版した、トルコ人ドイツ語作家 Feridun Zaimoglu は、「法外な愛国主義者」を牽制しながらも、ドイツが好きだと公言する<sup>50)</sup> トーマス・ブルスイヒは、新しい愛国心には平和主義が不可欠な要素であり、自分は平和主義者である限りにおいて愛国者だという<sup>51)</sup> 「故郷を持たない者は、少なくとも潜在的に、すべての故郷居住者の覚醒意識であり、未来の先触れである。だから私は、我々移住者はこの役割を職業として使命として引き受けねばならないと思う。」<sup>52)</sup> とフルッサーの言うように、我々は〈故郷を持たない〉ことを容認する限りにおいて、〈故郷〉という概念の可能性を見出すべきかもしれない。

## 注

- 1) SPIEGEL Spezial 6/1999.
- 2) 『故郷』三部作に関する様々なデータ、台本などは次のホームページに詳しい。http://www.heimat123.de/index.htm
- 3) Jost Bauch, Die neue Lust auf Heimat, JUNGE FREIHEIT Verlag GmbH & Co. www.jungefreiheit.de 50/0509. Dezember 2005
- 4) 例えば、「ベルリン〈故郷の日〉反対同盟」による〈故郷の日〉反対デモ。Demo gegen den Tag der Heimat am 6.9. in Berlin von Bündnis gegen den Tag der Heimat in Berlin — 22. 08. 2003:16 : 45. (http://www.de.indymedia.org/index.html)
- 5) Klaus Lindemann, Arbeitstexte für den Unterricht. “Heimat”. Gedichte und Prosa, Reclam, Stuttgart 1992, S. 8.
- 6) Anton Kaes, From Hitler to Heimat. The return of history as film, Harvard University Press,

- Cambridge, Massachusetts, London, England, 1992, S. 163.
- 7) Ebd, S. 168.
- 8) 日本の「故郷」概念については、稿を改めて論じたいが、戦時中に同様の役割を果たしたことは、満洲大日向村など開拓団の例をみれば明らかであろう。なお、Heimatの訳語としては「郷土」「郷里」などもあるが、本稿ではすべて「故郷（ふるさと）」に統一した。
- 9) この「Fernweh」という言葉もドイツ語特有の言葉である。ドイツ系のアメリカ人 Kraft Alsopによれば、「Heimwehは簡単に homesickness に訳せるが、Fernwehになると途方に暮れる。英語の wanderlust [これ自体ドイツ語源だが] は旅に出たいという憧れだが、数週間冒険旅行という含意がある。」Christiane Kraft Alsop, Home and Away: Self-Reflexive Auto-Ethnography, in: FQS (Forum: Qualitative Social Research), Volume 3, Sept. 2002, Chap. 4.
- 10) Udo Leuschner, Sehn-Sucht. 26 Studien zum Thema Nostalgie, 1991. HTML-Fassung fürs Internet 2000; PDF-Datei 2003.
- 11) ebd.
- 12) 品田穰によれば、紀元前1700年代の都市クノッソス、アテネ（前5世紀頃）、ローマ（前1～1世紀）でも「申し合わせたように自然を求め自然を鑑賞するという行動が発生」するが、それらの都市がその後人口1万人程度になって衰退、近世になって、「再びローマやロンドンなどにおいて復活している。つまり、自然を求め鑑賞するという行動は、都市がある規模になったときに限って起こっているようなのである。」品田穰、『都市の自然史 人間と自然のかかわり合い』、中公新書、1974、117頁。
- 13) 「伝統の流れの中で田園詩は次第に物質化され、文明の対抗像としての機能を失っていく。〈故郷〉の概念においては逆に、まさにこの対抗像の機能が、とりわけ19世紀にそれがイデオロギー化されることで、強められていく。すでに18世紀に形成されていた文明／都市対自然／田舎という対立構図は19世紀に強化される。田舎生活は〈故郷〉と同列に置かれもっぱら肯定的に評価される。」Andrea Bastian, Der Heimat-Begriff. Einige begriffsgeschichtliche Untersuchungen in verschiedenen Funktionsbereichen der deutschen Sprache, Tübingen (Niemeyer Verlag) 1992, S. 178.
- 14) Klaus H. Börner, Auf der Such nach dem irdischen Paradies. Zur Ikonographie der geographischen Utopie, Frankfurt, 1984, S. 250.
- 15) Walter Jens, Nachdenken über Heimat. Fremde und Zuhause im Spiegel deutscher Poesie. in, Frankfurter Allgemeine Zeitung Nr. 134, 9. 6. 1984.
- 16) 「というのは、まさに王政復古と文学的ピーターマイヤーの時代、1830年から1850年の間に、ドイツ文学においては、十分に〈哀しみや詩や感傷的な輝き〉を表し、政治的な



## 「故郷」の射程

- 希望の潰えた 1815 年以後は意識的に、安寧や〈片隅の幸せ〉への憧れという意味での感傷的な故郷情緒を描く、件の〈故郷〉例が頻出するのである。」Lindemann, a. a. O., S. 13.
- 17) Börner, a. a. O., S. 261.
  - 18) Manfred Riedel, Vom Biedermeier zum Maschinenzeitalter. Zur Kulturgeschichte der ersten Eisenbahnen in Deutschland, in: Harro Segeberg (Hrsg.), Technik in der Literatur, Surkamp Vlg., Frankfurt a. M., 1987. 参照。
  - 19) ヴォルフガング・シヴェルプシュ, 『鉄道旅行の歴史 19 世紀における空間と時間の工業化』, 法政大学出版局, 1982(87), 75 頁。
  - 20) Riedel, a. a. O., S. 110 f.
  - 21) Vgl. Sylvia Haider, Die Heimatschutzbewegung als gemeinsame Wurzel des heutigen Natur- und Denkmalschutzes, in: Lehrstuhl für Landschaftsökologie TU München-Weihenstephan (Projekt WS 2000/01), „Suburbaner Raum Berlin/Brandenburg“ 1. Teil: Eine theoretische Annäherung an den suburbanen Kontext.
  - 22) Rolf Peter Sieferle, Landschaftsveränderung, in: Seiferle (Hrsg.), Natur. Ein Lesebuch, München, 1990, S. 393 ff.
  - 23) Vgl. Lipping und Grabendorff: Lieder der Landstraße, Frankfurt/Main, 1984.
  - 24) Oswald Spengler, Der Untergang des Abendlandes (1918/22), zit. nach: Hans Jörg Sandkühler (hrsg.), Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd. 2 F-K, Hamburg 1990, S. 536-538 (Stichwort: Heimat).
  - 25) Bastian, a. a. O., S. 192.
  - 26) Ebd., S. 191.
  - 27) Ebd., S. 196.
  - 28) Barbara Eschenburg, Landschaft in der deutschen Malerei, München 1987, S. 196 f.
  - 29) 藤原辰史, 『ナチス・ドイツの有機農業 「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」』, 柏書房, 2005, 参照。
  - 30) 豊永泰子, 『ドイツ農村におけるナチズムへの道』, ミネルヴァ書房, 1994, 参照。
  - 31) 藤原, 上掲書, 201 頁より引用。
  - 32) ヨースト・ヘルマン, 『理想郷としての第三帝国 ドイツ・ユートピア思想と大衆文化』, 柏書房, 2002, 145-146 頁。
  - 33) 例えば, “Holzschneider der Rauhen Alb.” (Merian 3/XXIV, 1971, S. 47, 48)
  - 34) この点に関しては, 宇和川, 『「樹の話をする事」について—ドイツの森・雑考—』, 愛媛大学教養部紀要, 第 28 号, 1995, 参照。
  - 35) 後の話であるが, ライツの『故郷Ⅲ』の製作に加わったトーマス・ブルスイヒによれば,

ライツはアメリカで、スーザン・ソントグにほとんど敵視されたりして、ショックを受けていたというし、ブルスイヒ自身の経験でも、アメリカの大学で『故郷』がナチスの軽視だ、地と土掘りの駄作だと見なされているという。Heimat-Wende. Thomas Brussig über alte Erfahrungen, eine neue Heimat und seine Arbeit mit Edgar Reitz. <http://www.morgenpost.de/content/2004/12/15/feuilleton/722637.html>

36) Kaes, a. a. O., S. 168.

37) アイヒンガーとの対談 (注2 ホームページ参照。)

38) 同上。

39) Thomas Brussig, Heimat, Frankfurter Allgemeine Zeitung, 30. 12. 01. 旧東ドイツの事情は西ドイツとはかなり違うが、そのことについても彼は別のところで語っている。

40) Hans Augustin: Heimat ist immer anderswo. Betrachtungen zu einem bedeutungsschweren Begriff. Festvortrag aus Anlaß der 80. Generalversammlung des Vereines für Heimatschutz und Heimatpflege in Nord- und Osttirol

41) Peter Burke: Globale Identität aus Sicht eines Historikers, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B. 12/2002 (hrsg. von der Bundes Zentrale für politische Bildung).

42) Beate Mitzscherlich, Die psychologische Notwendigkeit von Beheimatung, [http://www.kirchen.net/upload/3205\\_mitzscherlich\\_2001.htm](http://www.kirchen.net/upload/3205_mitzscherlich_2001.htm)

43) Reinhard Piechocki, Heimat und Naturschutz. Gefahren und Potentiale einer unauflöselichen Verbindung, in: *Hundert Jahre für den Naturschutz — Heimat und regionale Identität* Dokumentation zum Symposium anlässlich des 100-jährigen Bestehens des Bundes Heimat und Umwelt in Deutschland auf der Vorburg von Schloss Drachenburg in Königswinter bei Bonn 3. April 2004.

44) Hans-Joachim Schemel, Emotionaler Naturschutz — zur Bedeutung von Gefühlen in naturschutzrelevanten Entscheidungsprozessen, in: *Natur und Landschaft*, Jg. 79, Heft 8, 2004, Seite 371–378.

45) Träumen und kämpfen. Ein internationales Autorentreffen in Sofia fragt nach Herkunft, Nation und Vaterland. (DIE ZEIT 50/2005)

46) Vilém Flusser, Wohnung beziehen in der Heimatlosigkeit (Heimat und Geheimnis — Wohnung und Gewohnheit), aus: Vilém Flusser, *Bodenlos. Eine philosophische Autobiographie*. Mit einem Nachwort von Milton Vargas und editorischen Notizen von Edith Flusser und Stefan Bollmann, Düsseldorf, 1992, S. 247–264.

47) Regina Römhild, Wenn die Heimat global wird (DIE ZEIT 12/2002).

48) Burke, a. a. O.

「故郷」の射程

- 49) Römheld, a. a. O.
- 50) Feridun Zaimoglu, Der Liebe zu Deutschland nicht schämen. (Deutschlandfunk, 28.09.2006. <http://www.dradio.de/dlf/sendungen/schwarzrotgold/546709/>)
- 51) Thomas Brussig, Pazifistischer Patriotismus. (Deutschlandfunk, 26.09.2006. <http://www.dradio.de/dlf/sendungen/schwarzrotgold/545913/>)
- 52) Flusser, a. a. O.